

京都秋期福音特別集会 第2回

「力は何処に」

——エペソ書第3章——

1975年11月23日

小池辰雄

キリストの充ち溢れ キリストに在りて 孝道師道 『無者キリスト』 キリストの信によつて
恵信一如 ゲーテ時代の「理性」 超在・貫在・内在 ナポレオン最後の気づき 祈り

【エペソ3】

1 この故に汝ら異邦人のためにキリスト・イエスの囚人となれる我パウロ
——2 汝等のために我に賜いたる神の恩恵の経綸は汝ら聞きしならん、³ 即ち
我まえに簡単に書きおくりし如く、この奥義は黙示にて我に示されたり。⁴ 汝
等これを読みてキリストの奥義にかかわる我が悟を知ることを得べし。⁵ こ
の奥義は、いま御霊によりて聖使徒と聖預言者と共に顕されし如くに、前代に
は人の子らに示されざりき。⁶ 即ち異邦人が福音によりキリスト・イエスに
在りて共に世嗣となり、共に一体となり、共に約束に与かる者となる事なり。
⁷ 我はその福音の役者とせらる。これ神の能力の活動に随いて我に賜う恵
の賜物によるなり。⁸ 我は凡ての聖徒のうちの最小き者よりも小き者なるに、
キリストの測るべからざる富を異邦人に伝え、⁹ また万物を造り給ひし神の
うちに、世々隠れたる奥義の経綸の如何なるもの乎をあらわす恩恵を賜わり
たり。¹⁰ いま教会によりて神の豊かなる知恵を、天の処にある政治と權威と
に知らしめん為なり。¹¹ これは永遠より我らの主キリスト・イエスの中に、
神の定め給ひし御旨によるなり。¹² 我らは彼に在りて彼を信ずる信仰により、
臆せず疑わずして神に近づくことを得るなり。¹³ されば汝らに請う、わが汝
等のために受くる患難に就きて落胆すな、是なんじらの誉なり。

¹⁴ ¹⁵ この故に我は天と地とに在る諸族の名の起こるところの父に跪ずきて
願う。¹⁶ 父その栄光の富にしたがいて、御霊により力をもて汝らの内なる人
を強くし、¹⁷ 信仰によりてキリストを汝らの心に住ませ、汝らをして愛に
根ざし、愛を基とし、¹⁸ 凡ての聖徒とともにキリストの愛の広さ・長さ・高さ・
深さの如何許なるかを悟り、¹⁹ その測り知る可からざる愛を知ることを得し
め、凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給はん事を。

²⁰ 願わくは我らの中にはたらく能力に随いて、我らの凡て求むる所、すべ



て思う所よりも甚く勝る事をなし得る者に、²¹ 栄光世々限りなく教会によりて、又キリスト・イエスによりて在らんことを、アアメン。

●キリストの充ち溢れ

パウロのエペソ、ピリピ、コロサイというものは、パウロ晩年の三部曲といってもいい素晴らしい書簡です。これはパウロの手紙の、ある意味において、絶頂のところ です。ローマ書は大建築ですけれども、このエペソ、ピリピ、コロサイは屋根のようなところですが、この屋根がないと雨漏りしてしまふ。天蓋のような、ちょうど大空が大地の屋根みたいですが、非常に広大無辺なという意味においては、エペソ、ピリピ、コロサイという書簡は、いわゆる宗教思想とかいうものでは書けるものではない。本当にパウロくらいキリストが充満しているということはちよつと他に考えられない。

ギリシア語に「エンテレケイア」という言葉があります。全一的に充ち満ちているのが「テロス」。充ち満ちて持つている、充ち溢れてあるという。キリストの充ち溢れが、パウロの中に澎湃^{ほうはい}としていくわけです。「テロス」という文字がこのパウロの書簡で、非常なドラマチックな構造をもっている。非常に有機体的な、まさに無限無量の質がある。福音はそういうものです。私はこれを読んでいると——もう解説なんていうものではない——話すのがいやになってしまふ。一番いい集会は、聖書を身読しながら祈りの世界に入るのが一番いい集会です。まあ、語るもやはり、止むを得ざるなりというわけです。パウロも、

「福音は止むにやまれずして語っている」

と言ってます。言葉をあなた方は聞きながら、どんどんその内容が溢れてくる。私の語っている以上のことが展開してくるというような聴き方をしていただきたい。

●キリストに在りて

今日は「力は何処に」という題です。パウロは本来ユダヤ人ですので、異邦人の伝道者とされる。ユダヤ人と異邦人の結びはどこにあるかということが、この2章の終わりの方に出ている。11節から読みます。

「¹¹ されば記憶せよ、肉によりては異邦人にして、手にて肉に行いたるかの割礼ありと称うる者に無割礼と称えらるる汝ら、

異邦人ですね、即ちギリシア人、以下他のいろんな民。ユダヤ人は割礼を受けることがユダヤ教徒のひとつの儀式ですから。

¹² 曩^{むかし}にはキリストなく、イスラエルの民籍に遠く、約束に属する諸般^{もろもろ}の契約にあずかに与りなく、

これがまさに異邦人です。

世に在りて希望なく、神なき者なりき。¹³ されど前に遠かりし汝ら今キリスト・



イエスに在りて、キリストの血によりて近づくことを得たり」(エペソ2:11)

「キリスト・イエスに在りて」

というのは、その血によつて贖われたから、キリストと連なることが無条件にできるようになった。でなければ連なり得ない。

「キリストに在りて」

というこの「在りて」という言葉がパウロの書簡にはたくさん出てくる。さっきの「エン」「の中に」在るといふ、「に在りて」といふのは「の中に在る」ということです。

パウロは始め、「のために」の世界にいた。彼は正に、

「神のために、モーセの律法のために、モーセの律法によつて」

なんだ。モーセの律法によつて、そして神のために熱心であつた。「神のために熱心」というのは、良さそうなんですが、これが非常に危ない。これがパリサイになる。カルビンもそれを犯した。「神の前に、神のために」といって、自分の信仰に反する者を火あぶりにしたような悪いこともカルビンはしました。これが宗教的な争いのもとになる。

「自分の信仰こそ本ものだ」

といつて、信仰を私する。^{わたくし}「無教会主義だ」とか何とかいって。内村先生が「無教会主義」と言おうが、塚本先生が「主義」と言おうが、私は

「ナイン(否)！ 主義ではありません」

という。「のために」と言つて我を張ると、これは必ず——主義主張、イデオロギー、立場、そういうものを持つているうちはダメだ——硬化現象を起こす、パリサイになる。キリストが一番嫌いだったのがこのパリサイなんです。パリサイ的な熱心でパウロがあつた。しかしながら、その熱心の度合いをキリストは見て、これをひっくり返さなくてはと。

これが、パウロが「に在りて」の世界に入つた言葉です。

「キリストに在つて、神に在つての熱心」

は本ものなんです。それは人を裁かない。けれども、「のために」の熱心は、これは自己を立てますから、自己の信仰を立てますから、これはあぶない。そういったような宗教的なこちら側の熱心というやつは、「のために」の世界になる。

無目的の目的^{みこころ}ということ。目的は何も要らん。「の中にある」といふと、この目的ならざる目的が——それが御意、神の経綸^{けいりん}ということ——そこに神の経綸の事態が、神の奥義の世界が、時々刻々に展開させられていく。それで、

「あ、これが目的でしたか」

というようなことになる。

芸術の世界もそうですよ。何かを目的としたような芸術は、臭みがあつていかん。本当



の芸術、美の世界は、カントはよくそのことを知っている。「無目的の目的」という。いう、在ることが直ちに目的を、終局を——「テロス」（終り）という字はおもしろいですね、「目的」という意味も持っている——その終局をそこに持っている。本当の現在の世界は終末の世界を持つている。私が「終末的現在」と言うのはそのことなんです。

私は何も目的は知らん。けれども、神さまの目的、本願がくる。この本願が目的なんですから。本願が目的なら、こっちは目的がなくていい。この悲願というのはまさに本願に即して、悲願に絶するところに、本願が本当にこれを被^{おお}つていく。そして悲願を全うする。

そういうようなわけで、パウロが、「のために」というパウロから、「に在りて」というパウロに変わった。旧約的なパウロから新約のパウロに変わったわけです。これはキリストの贖いと聖霊によってそうなった。

これが「に在りて」ということ。この

「キリストに在って」

の「に在る」もとには原因がある。それはもちろん、

「十字架の贖いと御霊の内住」

ということになってきます。だから、

「^{うらみ}16 十字架によりて怨を滅し、

ユダヤ人と異邦人の怨みを滅ぼし、

また之によりて二つのものを一つの体^{からだ}となして神と和^{やわ}らがしめん^{ため}為なり。

キリストはそうにして本当の和らぎを、神と人との間の平安、それからユダヤ人と異邦人との間の平和、これをもたらしただけです。縦の関係と横の関係を両方とも。

¹⁸そはキリストによりて我ら二つのもの一つ御霊にありて父に近づくことを得たればなり。

全くその通り。ヒルティが

「ゴッテス ネーエ」（神のそば近くに）

ということをよく言いますが、神の御許に、神の近くに、身边に在るという。これは本当にこの、

「御霊にありて父に近づく」

ということ。信仰の世界は、この「イン」「中」なんです。

「中」という字はおもしろい字だね。もともとこれは円を貫いている形からきている。漢字というのは世界最高の文字です。地球がそうだ。地球は丸くてちゃんと地軸がある。地軸を中心にして回転して太陽の周りを回っている。地球そのものが、最終的な一番奥の真理を地球の姿が表している。地軸がなかったら地球の回転はおかしなことになる。これはこの地軸的な消息でもってグルグル回転している。本当の「中」の世界は、太陽の周りをグルグル回る不思議な構造になっている。



コマがそうです。コマはグルグル回転して倒れない。一点で接しているけれども、倒れない。自動車は四輪、自転車は二輪。コマは一輪でも何でも無い、一点だ。これで回転している。回転していなければダメですよ、ジツとしていたら。

我々はジツとしています。ジツとしているけれども、これはもの凄いエネルギーが回転しているような存在です。信仰は常に静のうちに動を宿している。また、動の中に静を宿している。静動一如である。静かであるが眠ってはいない。静かではあるが死んではない。本当の動は静けさの中にある。「静かな水は深い」という。ざわめく、「ワッショイ、ワッショイ」と賑やかなのはかえって浅い。どうぞ、皆さんは、静けさのうちに——ということとは、「しよつちゅう沈黙して何も言うな」

なんて言っているのではない。大いにしゃべったつていいですよ、大いに歌もうたつてください。けれども——いざとなったら、もの凄い動が発動するような静けさでなかったらダメです。

「なんだ、結局あれは静かで、どうにもならないではないか」

なんて（笑）。阿蘇や浅間の噴煙は静かに煙を吐いているが、いざとなったら爆発するぞと。いざとなったら、時あつてか爆発するような存在。そのような動をいよいよ深くうちに宿すような在り方です。

●孝道師道

エペソ書3章6節、

「⁶即ち異邦人が

というのは我々が、

福音によりキリスト・イエスに在りて共に世嗣^{よつぎ}となり、共に一体となり、

パウロはユダヤ人だから「共に」なんていうことを言っているわけだ。

共に約束に与^{あずか}かる者となる事なり。

⁷我はその福音の役者^{えきしや}とせらる。これ神の能力^{ちから}の活動^{はたらき}に随^{したが}いて我に賜^{たま}う恵^{もの}の賜物^{たまもの}によるなり。」（エペソ3・6〜7）

「神の能力^{ちから}の活動^{はたらき}」、力のエネルギーによつて。「神の力」とパウロが言いましても、それはもちろんキリストの力、キリストに宿つた神の力です。キリストに宿つた神の力で、キリストをぬきにしては、パウロは考えられない。パウロは、「神」と言おうが、必ずそこには「キリスト」がいます。聖書はそのような読み方をしてくださいよ。

「ここに神とあるが、キリストとの関係はどうなんだ？」

なんて、そんな頭でもつて、「関係はどうなんだ？」ではないですよ。ちゃんと神という言葉の後はキリストがごさるんです。キリストの後には聖霊がごさる。「神・キリスト・聖霊」は離すわけにいかない。それを「三位一体」といっていいじゃないですか。そうすると今



度は、「三位一体論はどういうことだ？」なんていつてきかんにやっている。そして、

「三位一体はけしからん」

なんて言う。あたまでもって整えるようなことではないから、私はいわゆる今までの神学を破るような神学を書いてやろうかと思っている。「神学」というと、もうその言葉でもって「ああ、神学は……」なんて、除けものにする人がある。そうじゃないですよ。本当の神学は神学を笑う神学なんです。

もうキリストの世界にきたら、どういうことであつても、本当のものが出てくるんです。これはキリストのものだから仕方がない。だから、

「聴く耳のある者は聴くべし。読む目ある者は読むべし」

と。お釈迦さんも、キリストも、

「もう、説明の世界ではないよ」

と。これは全存在をもつて体験するまではわからんです、百万言を費やしても。

「八万四千の法を説いても、一つも説かなかった」

なんて、逆説的なことをお釈迦さんは言ったそうだが、全くその通り。

今の人たちは科学的なあたまでもって、何かすぐ分析・総合というような判断の仕方をして、いつまでたつても外側からものを見ているから、もう入れっこない。いつも申し上げているとおり、降参するまでは——私たちの判断をすべて投げ打って降参するまでは、全存在的にキリストの前に降参するまでは——この世界に絶対に入れません。降参するまでは、本当の入り方はできない。

「まいりましたー」

と降参して、本当に入っていくと、その道の達人になっていく。これはもう、私は何でもそうだと思います。

「もうギリシア人も、ユダヤ人も、男も女もない」

というようなことをパウロは言っているじゃないですか。今は民主主義なんて言っているけれども、あんな民主主義じゃないですよ、パウロが言っている本当の民主主義というのは、もう一切の差別がなくなってしまう。ということは、秩序をなくなしたということではない。私は今のいわゆる民主主義なんてものは大嫌いだ。

私は、どこまでも「孝道師道」を昔から変わりなく言っている。昔から変わらないが、同じ言葉を使つても、内容は次元が違っている。だいたい孝道師道の体現者は誰ですか。キリストじゃないですか。イエスはひとりの父に対して最大の親孝行者ではないですか、「お父さん」といって。お父さんを立てて、このお父さんの言うことを百%受けとって、これを体現していった。キリストくらいの孝子はいないんですよ。

あなた方、戦後の方々は、「親孝行」なんていう言葉を聞いても、どこか別の世界の言葉かと思うかもしれない。私たちは小さいときから、



「君に忠、親に孝に」

という言葉が教育勅語にあつて、ちゃんともう身にしみている。私は学校から帰つてくると、畳の上に手をついて、

「ただ今帰りました」

と母にやってみました。

「行つてまいります」

「おやすみなさい」

「おはようございます」

と、全部やってみました。

私の「宗教の時間」の講座に学生が100人以上いるけれども、私が初めに授業しようと思つたら、私がちゃんとお辞儀するのに、5、6人くらいしかお辞儀しないから、

「みんな立て！ 君たちが挨拶しなければ、私はこの授業をしないから」

と。それでピシャとやったら、もうその次から私が教壇に立つと、みんな立つてしまう。そして今でもちゃんとお辞儀をして敬意を表している。えらく静かに聴いているから、見ていると他の本を読んでいるやつがある（笑）。「何だ、出て行け！」と。

とにかく今の教育は、権威を持たないような先生方が多いから、どうにもなりませんよ。一番大事なのは先生それ自体。我々、保育園から大学に至るまで、教師それ自体です。だから、師道孝道といつても、この「師」がしっかりしていなければ、本当の師道はこないし、親がしっかりしていなければ、本当の孝道も出てこない。

子どもに親が遠慮しているような親ではダメなんです。もつと家でもって手伝いをさせなくてはいかん、男の子は。女の子はしますけれどもね、お母さんの手伝いを。男の子にはハッキリと手伝いをさせなくはいかん。家でもって甘えていたのではどうにもならん。そしてドラ息子ができてしまう。

キリストこそ本当に孝道を実践した人であり、また神さまを本当に師として、ただひとりの師としてその道を行いました。だから、孝道師道は実は、この福音の主体であるところのイエス・キリストが実践しておられた。

「聖書には孝道師道という言葉がない」

なんて言つたつてダメですよ。言葉以上の言葉が、事実があるんだから、その事実を正直、認めなくてはいかん。

そして、本当に一人びとりを隔てなく見ている、ということにおいて初めて、神主、神さまが主である。キリストが主であるところに、初めて本当に万人が人格的に、存在的に平等である。

「存在的に平等である」

ということと、



「秩序をもった構造である」

ということは何も矛盾しない。そういうことがわからないというのは結局、福音の世界に
来ていないからです。だから、どう説明してもしようがないです、福音を受けとらない限
りは。

日本というのは厄介な国だよ。欧米はそれだけの歴史を通して、このデモクラシーとい
うのが出てくる。デモクラシーの奥には神がござる、キリストがござるんです。エイブラ
ハム・リンカーンが言った有名な言葉、

「人民の、人民による、人民のための政治」

という演説の中に、

「アンダー・ゴッド」「神の下に」

という言葉があるんです。

●『無者キリスト』

どうぞ、皆さんは、福音における本当の構造をやはり——「神学」なんていう言葉を言
わなくてもいいけれども——自覚していないと、ただ妙に感情的な宗教になったらいかん。
人間の知情意というものは、この御霊の世界にいくと、自在に動いていく。そして自在に
つかわれる。本当の理性的な判断はやはり御霊の人がする。本当の力は御霊の人が持つて
いる。本当の感情も御霊の人が持つている。これは私はこの『無者キリスト』の序文のと
ころにも書いておいたはずですよ。あの三つの三部曲の序文はどれも非常にその意味で大事
ですから。「序文なんて……」と喋っていい加減な気持ちで読まないでいただきたい。

パウロの書簡が何と素晴らしい構造を持つているか。構造ばかりではもちろんない。そ
こに血が流れている。もの凄いエネルギーが通っています。だから、この『無者キリスト』
を読んで、

「ああ、こういうことなら、聖書にきつこう」

という気持ちを起こしてもいいという念願で私は書きました。聖書に來なかつたら、『無者』
を読んだつてしようがないんだ。

¹⁵ この故に我は天と地とに在る諸族の名の起こるところの父に跪ひざまずきて願う。

パウロさんは本当に平伏し、跪いて願っている。もう烈々たるもんですよ、パウロの姿は。
その点で気が抜けたようなクリスチャンはクリスチャンではないですから。

¹⁶ 父その栄光の富にしたがいて、御霊みたまにより力をもて汝らの内なる人を強く
し、

「御霊による力がくれば、汝らの内なる人は強くなる」

というわけです。「強くし」と、がんばってもダメですよ。強くなりますから。力の所在はど
こだよ。もちろん根源は神ですよ。そして、このキリストが、



「自分は何も力がない。無力である」

と言つて、この神の中に本当に自分を投げ入れたら、無量の力が彼の中にきた。誰かキリストほどの力を持つているか。福音書に溢れているところのこの福音は、その言葉も、その行為も、もの凄い神さまの天来の救いの力ですから。人を倒す力ではない。人を生かし救いあげていくところの力。サタンに対してはサタンをぶっ倒してしまうような、尾をまいて逃げて行ってしまう、そういう力です。

イエスは無力者、無者です。ところが、無者即無限無量者と申し上げているとおり——「アミッター」なんです——無量寿無量光という力がキリストの中に……（異言）……入ってくる。そういうキリストがこの力の、私たちの原始力です。今、原子力時代というが、我々は本当の原始力の子なんです。キリストという原始力の子。

「福音は言にあらざ、力なり」

とパウロが言つた。いや、言自身も力を持つている。言行一如ということがそのことなんです。

●キリストの信によつて

言行一如ということ。プロテスタントは「信仰のみ」とやっている。

「行為はまあまあ。信仰のみの信仰だ」

と、もう散々私は無教会で聞かされてきた。

ガラテヤ書の有名なところに——ガラテヤ書はテサロニケ前後書のあとでコリントで書いたパウロの書簡です——2章16節、

「¹⁶人の義とせらるるは律法の行為に由らず、唯キリスト・イエスを信ずる信

仰に由るを知りて、キリスト・イエスを信じたり。これ律法の行為に由らず、

キリストを信ずる信仰によりて義とせられん為なり。」（ガラテヤ2・16）

と書いてある。ここに、

「キリストを信ずる信仰によりて」

という訳し方をしているが、ギリシア語の原文ではそう書いてない。

「キリストの信によりて」

と書いてある。「を信ずる信仰」というと、信仰がサムシング（何ものか）になってしまうんです、こういう言い方をすると、ヘタすると。そして、無教会が「信仰、信仰」といつて、「自分の信仰」を信仰しているようなことになる。それだからパリサイになる。

「教会とは違うんだ。教会にはいろんな礼拝形式があるが、あんな形式ではない」

なんて、そんな相対的な比較判断を、外側の判断ばかりやって、信仰がサムシングになつてしまう、「キリストを信ずる信仰によつて」なんて言つて。

「キリストの信によつて」



という、「キリストの信」が主体なんです。「キリストの信をもつて」ということで、自分の信仰じゃない。「キリストの信」というのがサブジェクト（主語）で、それからオブジェクト（客語）にも、「キリストを信ずる」ということにもなりますけれども、「キリストの信」ということが土台なんです。キリストの、

「神さまをいかに受けとっていたか、それを受けとることによって」

なんだから、「キリストの信によって」というのがハッキリする。それは

「キリストを信受することによって」

で結構ですよ。「キリストを信ずる、信仰によって」なんて、そんな名詞はないんだから。「信ずる信仰」なんていう名詞はない。

「キリストの信によつて」（ディアピストークリストウー）

と書いてある。

それはどんなにこちらの行為が破れていても、その行為は本もののなんです。二段構えに「自分の行為は」なんて考えていたらダメです。信そのものが一番内的な行であるんです、信そのものが。その信そのものは、内的な行は、神の力なんです。

「神が行わしめている。キリストが行わしめている。こつちには何も無い」

という、その気合です。その気合は説明できない。この気合が受けとられてきたら……（異言）……これはもう本当に——私は溢れてしまうがないから時々異言がでてきて、ちよつと申し訳ない——キリストによつて生きている。

だから、何といえますかね、私なんてのはいないんですよ、小池なんてのは。写真に撮ったら映らないかもしれない。映ったらまだダメですけども（笑）。

そういう事態がキリストの信。もうキリストは本当に、

「我と父とは一つなり」

というのは、いい加減な形容詞で言っているのではない。そうでなければ、あんな素晴らしい福音書のような事態が展開してこない。キリストが、

「我なり！」

と言ったら、ローマの兵隊がゲッセマネでぶつ倒れたではないですか。この「力は何処に」とはこのキリストにある。そのキリストを私たちが受けとることによって力がくる。

「私たちの中に受けとることによって」

というのは、御霊のキリスト——キリストの御霊と言ってもどっちでもいいけれども——この御霊のキリストが我々の中に入ってくる。

これは宗教的神秘です。私の中に御霊のキリストが入ったら、あんた方の中には入らないか。冗談じゃない。みんな誰の中にも100%に入ってます。これがこのミステリオン（神秘）、宗教の世界のミステリオンです。だから、五千人の人にパンを食わせたって——五千人どころではないんだよな、もう何人いようが——キリストの生命は地の果てまで



も世の末までも分かたれて限りない。これが本当に無限無量のキリストである。まあなんという人でしょうかね。本当に父なる神と完全に一つ。だから、

「我を見し者は父を見しなり」

とハッキリ仰った。

「キリストの他に神さまはどこにあるか？」

なんて言ったって、ありはしないよ、それは。キリストを受けとらない限り、本当に神さまなんか解らん。受けとれないですよ、絶対に。冥想したってダメです。ヘタすると悪魔が出てくる。

●恵信一如

キリストの生命は、我々人間界ばかりでなくて、この自然界にも浸透しています。パウロはそういうことを遠慮なく言っている。エペソ書4章のところに、

「⁶凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在し、^{いま}凡てのものを貫き、凡てのものの内に在したもう。」(エペソ4:6)

これも私は大好きな言葉の一つです。頭の狭い、いわゆる論理的な人は、すぐそれで

「これは汎神論がちよつとこの中に入っている」

だとか言う。何をぬかすかと言うんだ。本当の御霊の自由な世界を知らないものだから。パウロは、

「すべての者の父なる神は一つ」

と言う。昨日はこの「一」の話をしましたが、この「一」の根拠は、神がそのような一者、絶対一者です。この絶対の一者は、超絶の一者は、すべての上に超在しながら、すべてのものに貫在する。貫き在る。またすべてのものに内在する。すべてのものですから、神は自然界にも内在してある。そうすると、汎神論だよな、宗教的にいうと。そこに神の栄光が現れている。キリストも言われたじゃないですか。

「野のひとつの花

アネモネだか何だかしらん、

この花の中に神さまの栄光が現れている」

と。白かったり、黄色だったり。無色透明の太陽の光が色々な色に、七色に反映するじゃないですか、虹のように。不思議だね、これ。どうしてこれは黄色くなるんですか、どうしてこんなに白色なんですか。まあ物理的にはある説明はできるでしょう。けれども、とにかく不思議だ。造化の妙というけれども。神の栄光の現れ。自然界に不思議が現れる。まだまだ人類のあれ(知能)はダメなんです。

なんかあの空飛ぶ円盤というのがあるね。どこから飛んできてどこかへ行ってしまう。あれは変なやろうだね(笑)。まだ地球の人間は次元が低いから相手にならんとかい、そ



うという判断をしているそうだ。それはまだ人類の科学もかなわんです。というのは、彼らの中には何か霊的なものがあるらしいね。

これでいいなんていうところはない。だから、限りなく私たちはこのキリストの中に入る。「プロテスタントの、カトリックの」なんて、そんなことを言っているひまはないんだ。本当に使徒たちと一緒に、このキリストの中にグーツと深く入っていく。祈りの世界では、限りなく深くなつてくださいよ。

まあそれは、大きな声して祈るのもいいですよ、みんなで。けれども、一人で深く、沈黙で深く祈りこんで入る。シュバイツァーがパウロのことを書いている本の開巻第一頁に、

「パウロは一人の神秘家であった」

と書いた。これは「キリスト神秘」という。このキリスト神秘に、パウロ、ヨハネに本当にあやからなくては。これに負けないくらいの意味で、あなた方一人びとりはキリスト神秘の中に入っていく。

中世の神秘家はややもすると、キリストが抜ける面があった。けれども、キリスト神秘の世界は、この十字架の贖いを通らなくてはいかんですよ。十字架の贖いを通る。なにもパウロ的な十字架ということ、私はただ儀文的に言っているのではない。とにかく、罪の贖いということ、キリストが贖いとおつてくださったということを、自分のいかにかわらず本当に根底から私たちを自我という我執から解放してくださったことがあの十字架において現れているということを、これを本当に受けとつて、そこに初めて恐れなくキリストのうちに入ることができる。

「¹⁷信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ」

という。「信仰によりて」ということと「御霊によりて」ということは一如なんです。

「¹⁶父その栄光の富にしたがいて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強く

し、¹⁷信仰によりてキリストを汝らの心に住まわせ、」

と言っているのは、これが対句になつていっているのは、全く同じことを別な言葉で言っているにすぎない。「御霊によりて」ということと、「信仰によりて」ということが、私たちにおいては一つでなかったらダメなんです。

また、「恵みによりて」というのと、「信仰によりて」というのが一つなんです。だから、それを「恵信一如」と私は申します。キリストという恵みを受けることが信仰なんだから。キリストという恵み、この救いの主体であるキリストを受けることが即ち信ですから、恵信一如は当然のことである。

その恵みの主体の方を忘れて、「信仰、信仰」とやっているのが普通のクリスチャンなんだ。それだから、

「私の信仰はまだ弱いから……」

なんて、「信仰」を問題にしている。信仰を問題にし、信仰を私するから、さつきから申し



上げているとおり、行き詰まったり、堅くなったり、パリサイになったりする。

「私は信仰なんかありませんよ」

と言つてやる。そんなクリスチャンはあるか。ところが、ある。そういうような意味における「信仰」なんてものはない。本当の意味における信仰は、信じ、交わる世界（信交）がある。ただ仰いであつかりではない。

信入と言いたい。信じ入る。信じ入らしめられている。みんな上からの作用です。地球は自分で動いていますか。太陽の力で動いている。もの凄い太陽のエネルギーで。この太陽のエネルギーが地球を動かして、私たちを生かしている。キリストのこのエネルギーが、福音のエネルギーが、キリストの御霊のエネルギーが私たちを生かしている。その他の何で生きているんですか、いったいクリスチャンは。クリスチャンは何で生きているんですか。自分の信仰なんてものは、そんなものがエネルギーだと思ったら、必ず行き詰まる、ダメになる。

ありありと生きていたもうキリストに接する。二千年前も今も同じこと。キルケゴールが「同時性」と言つたけれども、まさに同時性なんです。また同質性なんです。もはや、この相対的な時間なんてのは問題でない。これは世の終末に至るまで。実に終末は今こちらに來ている。

●ゲート時代の「理性」

ゲートの詩にこういう言葉がある。『神と世界』という詩です。ゲートという人は、「神・自然・我」というものが融合しているような人です。福音的に私は、ゲートの言葉をゲート以上の世界で捕まえて、言おうとしているわけですから。

「充ち満ちた恵み、祝福を自分にふさわしいようによく享受せよ。……生命が生命を喜ぶところにおいて、理性をして、常に至る所に現在せしめよ。」

ゲートの時代はまだ「理性」「フェアメンフト」を非常に重んじた時代です。カントの「純粹理性」「実践理性」と言っているように。あの時代は、精神的な黄金時代です。人間の理性というものを非常に肯定して考えている。全くうるわしいです、ある意味において。私に言わせると、この「フェアメンフト」（理性）は「デア ガイスト」「霊」と言いたいくらいなんです。

「御霊をして、常に至る所に現在せしめよ」

と。フェアメンフト以上の世界です。その点でゲートは、この聖霊の世界を本当に受けとることをしていなかったところに、ゲートのひとつの限界があります。けれども、彼は非常に靈的なところがある。「聖霊」と言わなくても、もちろん聖霊の世界も彼は知っています。聖書を非常に親しく読んでいましたから。彼なりに「ゴッテス ガイスト」「神の霊」ということは言ってます。ただ、新約聖書的な意味における聖霊ということをキリストとハッ



キリ結びつけて言うことを彼はしなかったけれども。

「生命が生命を喜ぶところにおいて理性が——私に言わせると御霊が——至るところ現在するように」

生命が生命を喜ぶ。キリストの生命が本当に喜んでるところ、我々の生命がキリストの生命を喜んでるところ、そこには聖霊が常に現在しているように。そうすれば、

過去は存続している。

本当の意味において過去が保たれる。

また未来、将来的なものがあらかじめ、生き活きとそこに将来的なものが来るではないか、現在化してくるではないか。そういうところでは、瞬間、現在は即ち永遠である。」

と。即ち、過去と未来と現在というものを結びつけて、それを永遠的に捕まえているところのゲーテの魂はやはり、言葉の広い意味において、福音的な角度を彼はもっている。なぜ、ゲーテというやつがとにかく凄いかというと、この神の霊の世界、神に対する畏敬の念を持っている。キリストの贖罪ということは、彼は言わないけれども、聖書の世界をむしろヨハネ的にこの「生命、光、愛」を受けとっている。これはゲーテの大好きな言葉です。

「レーベン（命）、リヒト（光）、リーベ（愛）」

この三つの「L（エル）」は非常にゲーテの言葉にたくさん出てくる。ということは、ヨハネ的に——ヨハネ伝がやはり彼は好きです——ヨハネ的に彼はたしかに偽りなく入っている。彼は正直な魂ですから。童心をもっている。

偉大な人間というのはみんなこの童心がある。権謀術数をたくましくしない。そのままをぶつける。こないだの棟方志功もそうだ。棟方志功なんていう画家は本当に自分をぶつけているようなやつだね。あれはもう宗教的な境地です。

「フエアヌフト」（理性）ではなくて、我々には「デア ガイスト」「御霊」です。御霊が常に現在しているところには、過去も現在も未来も全部、永遠的な角度でこれを持っていて。だから、どういうものを読みましても、この聖霊の光で、キリストの光で読むと、その作者ゲーテがいかに素晴らしくても、それ以上の世界がちゃんと見えてくる。また、読めてくる。

● 超在・貫在・内在

そういうことで、パウロが、

「神が一切のものに超在し、貫在し、内在し給う」

ということは、御霊に於て言っているんですよ。神というものを何かひとつの鬚のはえたお爺さんとして見ているのではない。キリストが「父」と言っても。そういう「父」とか、「神」とか、もう表現できない、そういった実在に対して——我々が実は神の現象体ではないですか。



「人は神の似姿に造られた」

我々が即ち、霊が止まるのを「霊止」という。神霊の止まっている私たち。この破れ器が、しかしながら、いくら破れていても、神さまの本来似姿であった。それを回復してください。つたのがキリストである。たまらないじゃないですか。このキリストを宿したら、

「われを見よ」

と、ペテロも言った。「われを見よ」とは、

「わがうちなるキリストを見よ」

ということですよ。そうしたら、人々は、ペテロは偉い野郎だと思って見たら、

「なぜ、私を見るか」

と、彼は言った。あなた方一人びとりの中にこの御霊があるところには——私は合掌したいですよ——そのような存在で皆さんはある。お互いにその中においてこの御霊が宿って形成されたところの何ものか、その人でなければならぬものがある。神さまは天下一品に造っていらつしやる。それが「一」であるということ。

そのような「一」が集まるところにまた力がある。これが「エクレシア」というものです。エクレシアというのは一人びとりがそのような「一」であるときに本当のエクレシアであつて、ただ集まったものがエクレシアではない。

「キリストに召されたる者の群」

というのは、群に何故に力があるかというのと、一人びとりにそのような御霊の力が来ているから。一人びとりがまたそのエクレシアを本当に背負っているような存在であるから。そのときは、どのようなことがありましても、絶対に崩れていかない。

世界の教会が今はダメです。そこらの教会に行つてみると、中年以上のおばさんたちがたくさんいて、青年がいない。私がドイツに行ったときもそうですよ、中年以上のおばさんの方が多い。その次はやはり中年以上の男だったかな。それから若い女性で、若い男性がいちばん少ない。ダメじゃないかと。だいたい、キリストという素晴らしい青年が元祖であるのに、青年がキリストを受けとらないなんていうバカらしいことがあるかという。あなた方、二十代の男性諸君は重大な責任を持っている。

「このわがうちなるキリストは、何に負けるか」

と。一人びとりが本当に天下を相手にする英雄であるわけなんです。

●ナポレオン最後の気づき

「英雄」でもって、忘れることのできない文句がある。これはヒルティの本の『病める魂』という中に出ている言葉です。

「力こそが問題なのです。その他のものはすべて何の役にも立たないのです。

ヒルティはなかなかおとなしい人であるのに、凄いことを言う。



終末に向かう歴史時代、いやむしろあまりにも文明化した瀕死の世代の、これは二十世紀の始めです、ヒルティがこんなことを言っているのは。

こうした救いを求める叫びは今や四方から我々の耳に聞こえてきます。私たちにどうしても必要なのは何よりもまず力である。知性でも啓蒙でも享樂でもない。これらはみな力の源泉ではなくして、むしろ力を前提とするものである。この点についてはすべての人の意見が全く一致している。だが、力はどこからやって来るか。明かにそれは力そのものから来るのです。その他のどこからでもない」

と言って、「力はどこからか」ということで、体力や智力や財力でもなければ、いわゆる自然力でもなく、またニーチエの言っているようなものでもない、ということを書いています。そして、ナポレオンがセント・ヘレナに流されて、そこでのナポレオンの言葉がここに引用してある。ナポレオンはまさに力の英雄で、その当時のヨーロッパを席捲した。「福音書には不思議な力がある。

と、ナポレオンは最後に気がついた。

言っに言われぬ作用力がある。心を魅すると同時に理性にも訴える或る温かさがある。福音書の内容にふかく思いをひそめると、まるで天空でもながめているときのような気持ちになる。福音書は書物ではない、行動能力をそなえた生きものである。そしてその普及に反対するすべてのものを引きさらってゆく力さえ持っている。この書は特にこの私の机の上におかれてある。私はくりかえしこれを読んで倦まないのである。毎日、私はおなじ喜びをもってこれを読んでいる。

ナポレオンは最後に気がついた。さすがにナポレオンだよ。

キリストは語る。かくしてもろもろの世代は、血のきずなよりもさらに緊密な、さらに深く、心こまやかな絆によって彼に属するのである。彼は愛の炎を燃え立たしめている。これによって、何よりも強力な利己、自愛は打ち滅ぼされる。

キリストの愛の炎は利己的なものを打ち滅ぼしてしまうと。これは本当です。

われわれは彼の意志のこうした奇蹟から、この世の創造的な言葉を読みとらずにはいられない。キリストの最大の奇蹟は、疑うべくもなくこうした愛の国である。

あらゆる時間的な限定を打ち破って、人間の心を眼に見えないものへと高め、かくして天と地との間に不壊の絆を創ることができたのは、ひとりキリストのみである。なぜなら、率直にキリストを信する者は、すべて、こうした不思議な愛、自然を超越する高次の愛、単なる人間悟性をもってしてはいかんともしがたい現象であるこうした不思議な愛を感じるからである。それは、この新しいプロメテウスによって地上にもたらされた聖なる火であって、

「新しいプロメテウス」とはキリストのことです。プロメテウスは天上の火を盗んだ。天来の火をキリストは灯したから。「この火燃えたらんにはもはや何をか要せん」と言った聖霊



の火のことです。

偉大な破壊者である〈時〉でさえも、それを消すことはできないのである。」

キリストの炎は消すことができない。どんな破壊者もこれには負けてしまう。ナポレオンはそのようなヨーロッパの、ある意味においては、破壊者だったが、

「俺はもうキリストの前には降参した」

というわけです。ついで、ナポレオンは自分自身との比較を試み、次のような言葉で結んでいる。

「全世界で愛され、畏敬され、伝道されているこのキリストの永遠に活ける国と、この

私のひどいみじめさとは、本当になんというちがいであろうか。」

ナポレオンは本当にキリストの前に降参して、こういう告白をしている。どんな英雄も、

「私はなにも力がない」

と言ったこのキリストが最大の有力者、最大の英雄です。十字架にかかつて一切を荷^{にな}ったところのキリストは本当の英雄だった。であるから、墓を蹴破つて——ローマの兵隊が墓を守っていたけれども、あの岩盤が崩れ落ちた。これ靈震である。地震ではない——靈震によって彼は甦^{よみがえ}つてきた。この甦^{よみがえ}りのキリストにぶつかって、始めは使徒たちも何か疑っていたけれども、やつと気がついた。彼らはみんなパウロと同じです。

「眼^{うろこ}より鱗^{うろこ}の如きもの落ちたり」

なんです。それで立ち上がった。そして、このキリストが、

「祈^{いのち}って待っている」

と仰ったから、集まって祈っていたところに聖霊が臨んできた。ペンテコステによってキリスト教会が始まったのに、ペンテコステの本当の受け方をしていないこのキリスト教の歴史——全体とは言いません——これでもう20世紀は凋落^{ちようらく}している。

たしか明治6年に築地でもって合同の集会があった。これは非常に靈的な集会で、何か道を通る人がその中に吸い寄せられたという。それくらいの驚くべきペンテコステがあった。それでみんな燃え立った。ところが、その燃え立った現象を内村先生が、

「あれはちよつとキチガイじみていた」

ということ——ちよつとあのペンテコステの時に、「あれは酒に酔っている」なんて言っているでしょ、それと同じで——

「自分たちもちよつとおかしい、行き過ぎた」

なんていうわけで、この聖霊の火を消してしまった。それで元へ戻って「聖書の研究」なんていうことになった。

内村先生をなにも私はけなすわけではないけれども、聖書の研究は結構ですけれども。内村先生はもちろん力があります。先生の文章は素晴らしい。何かそこにはもちろん御霊が働いていると思います。けれども、なぜ使徒たちのようにもつと聖霊の世界を深めて、そ



して無教会は前進しなかったか。内村先生は、いわゆる主義主張は実は嫌いなんだ。なかなか幅のある方です。けれども、本当に聖霊の事態を使徒的な角度で、次元でもって、進めていらつしやらなかったから、残念ながら無教会は限界ができてしまった。

それを突き破ったのが手島さんと私です。だから、

「あの二人はおかしい」

と、私たちは無教会からさんざんやられた。いいよ。昨日も申し上げたとおり、無教会のアウトサイダーだけれども、キリストの使徒たちのインサイダーになったんだから、何もこわいことはない。むしろ、相手がお気の毒でしょうがない。

「なぜ、あなた方は本当に勇敢に突入しませんか。聖霊は、キリストは呼んでいるではないか。この信仰の世界で何をグズグズしているか、何を自分で制限しているか」

と。それが我執というものである。自分を抜けていなければ、人間はそのようなものに接するまでは、本当のものの来れないように出来ているんです、偽りなく。魂の世界は偽りが無い。本当にその世界に来なければ、もう何ともいえないところの本当の生命というのは感じないように出来ているんだ。どんなに人間が偽っても、つくつても、この魂の世界だけは誤魔化しがきかない。だから、その内側で自分で制限して、

「まあそこ（聖霊）はちよつと……」

なんてやっていたら、ただそれだけの人になるだけのはなし。自分で自分を裁いている。自分で自分を制限している。

どうぞ、皆さんは、

「この聖書の世界は、今言っているような普通のキリスト教ではない。人ごとではない」

と。この「一」が、あなた方がこの使徒たちのペテロとなり、ヤコブとなり、ヨハネとなつて、また無名の女の方、ルデヤを始めマリヤ——マグダラのマリヤもそうです、あとで救われたに違いない——そういうような存在となつて、皆さんが、男といえども女といえども、老いたるも若きも——そんな区別はひとつも要らん——一人びとりが天下一品にキリストの器とされる。もう楽しくてしょうがない。そういうのが本当のエクレシアをつくっていく。

その力は聖霊の愛、愛の聖霊である。このキリストに現れた、かたい化体していたところの御霊の愛、愛の御霊が力を持っている。愛より力強いものはない。パウロがコリント前書13章で愛のことを言っているが、

「愛は最大の力である」

とは、彼はそこで言ってくれなかったけれども——他のところでパウロは言っているでしょう——愛こそが最大の力なんです。



『力の秘訣』というヒルティが書いた最後の論説がある——これは私は訳してありますけれども(著作集第五巻『百世の師ヒルティ』に収録)、非常に好きなものです——そのような愛は、さつき読んでいただいたところに、

「¹⁵この故に我は天と地とに在る諸族の名の起こるところの父に跪^{ひざまず}きて願う。¹⁶父その栄光の富にしたがいて、御^{みたま}霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、¹⁷信仰によりて

この「信仰によりて」は「御霊によりて」と同じこと、これを受けとることによって、キリストを汝らの心に住まわせ、

住んでいる。私は、皆さんは、キリストと一緒にですよと。

汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、

キリストという愛に根ざし、キリストという愛を基とする。グルント、底力だと。力というのは底力のことです。底力を持った人。

¹⁸凡ての聖徒とともにキリストの愛の

愛のキリストの、

広さ・長さ・高さ・深さの如何^{いかばかり}許なるかを悟り、

無限なことを、無限無量なことを悟らなくては。それをパウロは面白いね、「広さ・長さ・高さ・深さの如何^{いかばかり}許なるか」なんていう。みんなこれは霊界の神秘の事態をただこういう表現をするだけのなしです。

¹⁹その測り知る可^べからざる愛を知ることを得しめ、

「知る」とは何も頭で知るのではない。それを全存在で本当に——「悟る」というも、「知る」というもいい——まさに覚者なんです。仏さん、ブッダ、「南無阿弥陀仏」の「仏」。私たちはそのようにして覚者なんです、御霊が来れば。「南無阿弥陀仏」はそのまま我々キリスト教の言葉にして一向差し支えない。ただ仏教で使っているから、そう言うと、仏教式に響くから困るけれども。私たちは、

「南無キリスト」

です。キリストに帰入する。帰り入る。帰り入ることがあの凄い前進であります。

凡て神に満てる者を汝らに満たしめ給わん事を。」(エペソ3・15〜19)

充^みち満ちているから、パウロは言わざるを得ない。溢れているから、充ち溢れている。溢れてしょうがない、泉のようなもの。光体とされるから影がなくなる。自分自身が光体とされるからね、昨日の話の親鸞みたいなわけだ。

まあこんな消息はそこらにないんですよ、正直。だから、私たちはこの土の器に、破れ器に、このような溢れてやまないとこのキリストの愛のエネルギーがある。エネルギーは同時に生命です。これは人に分かたざるを得ない。なんとかして人に分かたざるを得ない。ただそのまま持っていたら淀んでしまう。淀んでいるものは本ものではない。常に流れて



いなくては。

クリスチャンといいながら、それが本当に爆発し流れているような在り方をしなかったら、それは本当に御霊を受けているのとはちよつと違うね。どうぞ、皆さんは限界を知らないような人に、無限定無限界の人になつてください。

この有限の中に無限なるものが来ているんだから。この部屋の空気だつてそうじゃないですか。この部屋の空気は有限的な枠を持つている。けれども、これが本当に外界と断たれていたら、我々は窒息しますよ。潜水艦だつて、上から空気が来てなかったら窒息してしまう。ところが、これは無限な空間と、全世界の空間とつながっている。有限でありながら無限である。

我々の魂の世界も、有限の相対的存在であるが、質は無限無量なものである。死んでも死なない生命が来ている。もういわゆる相対的な死生を超越している世界、永遠の生命とというのが本当にきている世界です。

「我を受ける者は永遠の生命で、死んでも死なない」

とキリストが言つてらつしやる。そのとおり。そういう質の信仰でなかったら、「信仰、信仰」なんて言つてもしょうがないですよ。「信仰」という言葉が躓いてしょうがないね。わるい言葉だよ、これ（笑）。いいですね、この気合がわかれば、もうアーメン、ハレルヤですよ。もう何て言いますか、本当に喜びと楽しみと、光が溢れてしょうがないです。では、そこまですします。

● 祈り

パウロをかくもお捕らえくださり、

「我はキリストの奴隷である」

と告白した、私たちの偉大なる使徒パウロの書簡の一部を拝読し、そこに文字の奥から溢れてくるところのあなたの真理に圧倒されて、言うべき言葉もありません。

主さま、本当に私たちは生涯をかけて、この福音の証人としていよいよあなたがお捕らえくださり、また貰いてくださり、内住してくださり、そして、これを溢れさせてくださり、そして、いかにもして、苦しめる者、悩める者、求める者にこの驚くべき世界を与え、

「ああ、ハレルヤー！」

と、その人たちが叫んでくれるくらい嬉しいことはありません。どうぞ、そのようにして、神さま、この一人びとりをお用いくださらんことを切に願ひ奉ります。今日の午後のおときを、どうぞ、あなたが親しく御導きくださらんことを願ひ奉ります。

また、明日の講演会（演題：「無者キリスト」）にいろいろな人が来るかと思いますが、どうぞ、そこに水を割らざるところのこの福音が光を放つことができますように、僕どもをお使いくださらんことを願ひ奉ります。聖名により捧げ奉る。アーメン。

